

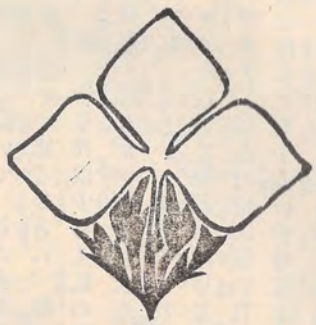
銀鈴第貳拾壹號（每月一回二十五日發行）明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可  
明治四十年四月二十七日發行

文藝  
雜誌  
銀鈴

第貳拾壹號

銀鈴第貳拾壹號揭載目次

| 禁 轉 載            |       |
|------------------|-------|
| ボンプ物語(譯文).....   | 河野素陽  |
| 本誌の發展(社告).....   | 銀鈴社同人 |
| 銀鈴社詩稿(短歌).....   | 橘蝶妻等  |
| 丙午の雲石歌壇(評論)..... | 白箭朗   |
| 合同の辞(告白).....    | 朝日山錦水 |
| 醫 院(長詩).....     | 河野翠激  |
| 文藝雜俎(評論).....    | ..... |
| 閑人閑話             | たちばな  |
| 文界片々             | 黑華生   |
| 寄贈雜誌             | 編輯子   |
| 使 命(長詩).....     | 飯塚雲水  |
| 感想 欄(雜文).....    | 野葡萄等  |
| 春雨日記(小品).....    | よしあき  |
| 雜 吟(俳句).....     | 梅 太 等 |
| 陽 炎 會(俳句).....   | ..... |
| 社 告.....         | 記 者   |



銀 鈴

2 1

ボンプ物語

河野素陽譯

(明治四十年四月二十七日發行)

私はこの町で、一番の寶の保護者——尊い職務を持つて居るものです。その上に、私が職務を遂行するに就いて、洗着、實直であるのど、不屈の精神があるのどは、外のね役人達にいゝ手本を示してゐるのです。夏冬を通じて、誰れも無益に私を捜す事はない、なぜならば私は始終市場の賑やかな處で、いろんな人を歓迎して居ますから。

蒸し暑い日中には、私は渴いて居る人達の給仕人であるためには、鐵盃が私の腰にぶら下つて居るのです。出来るだけの聲を張り上げて、誰にも聞こえるやうに私は「れ出で、皆なの衆、いゝ飲料水がありますよ、ブランドイよりも、葡萄酒、麥酒よりもモットよい綺麗な水がありますよ、た錢は一厘も要らない、お出で、れ出で来て勝手に呑んで下さい。」

私がこんなに叫んで居るのに一人も客が無いとすれば、誠に心細い事です。

サアれ出でなすつたぞ。

「お暴う、皆なの衆、お呑み下さい、モウ一杯お呑み下さい、まだ、あなたの牛皮の靴に被つてゐる塵のやうに、喉にあるのをすつかり洗ふには、もう一杯飲んで下さいやう、ねや、あなたは今日五六里も歩いたものですね、それに酒屋の前を通り越して、清らな小流れや湧き立つ泉水の傍に立つたとは感心です、ね呑み下さい、呑んで昨夜の酒宴で熱が出て困つて居るあの御方、私を捜してゐるお方に場所を明けて上げなさいね。」

「サア」赤い顔の君、私とあなたとは今までは赤い他

人でした、まあ可哀さうに！水は、シュウ、シュウ云つて、赤い、熱い、食道を越して居るのです、正直な「酒呑」の若、事實を私に咄しなさい、あなたは又六や酒銘屋で、お子供方の衣服の代も、この水の甘さ半分もない一杯の酒のために造つたんでせう？

「ね、次は誰、オウ小さなね友達、恰度學校が退けたものだね、あの輝やく奇麗な顔を磨いたり、鞭でプタレた痕をこのポンプの水で洗ひ落したりするため、これに出でたの、お取りなさい、君等の生涯の流れのやうにきれいな水、ね取りなさい、私は君等の心や舌が、今よりもひどく渴くことがないのを望むのです。れ子供衆、盃を置いて、この場所を、敷石の上を非常に注意深く歩いて来るお方に、御おけなさい。」

「何、何、あなたは少しも私の事を考へずにね通りか、丁度私の職務が酒庫を持たない人のために設けられたやうに、宜しい、あなたはね、怪我は無いですか？サアコルクを抜いて徳利を傾けなさい、だが、あなたの指がツク、痛んだ時に泣いたつて、ほえたつて、私の知つたことぢやないませんよ。」

「赤い舌を出して渴きさつてる大、私の對待を笑つち

やいかぬ。あれ、犬は後足を立て、種から出る水を、心行くばかり呑むのです、然し、再び軽快に飛び去つて了つたではありませんか、大顎狗若、君は今まで中風を一度でも患らうた事がありますか。」

(ホーンソーン)

本誌の發展

我が銀鈴社が、能く己に三年の苦節を全うせるは、社友及び讀者諸君の明知せらるる所なるべきを信ず、成社は曩に松江草笛會と合同し、今亦白鳥會と合併せり、而かも青年文士朝日山錦水君新に社内に入り、以後誌上に見えんとす云ふ、幸ひなる哉。

我社は、今や、諸君が我社の地方雜誌界に於ける勢力を強し給ふべき、好箇の時機に達したることを、自ら告ぐるの光榮をよるこぶ。

銀鈴社同人

銀鈴社詩稿

橘 蝶 妻  
 清淨の冠よそほひわが君に禱らぬ間  
 なし戀の新生  
 春の風日傘つづける舞姫の袖よりたかく蝶飛べるかな  
 八重垣郷人  
 冬の野とさびしうつけぬれこそかに神のたまへるわが心ゆゑ  
 濱村仁子  
 春の月人のかたへに祈禱する木かけの君がみ頬にさしけれ  
 田口韻芳  
 秋の小野毒とも知らずふくみたる花のひとよにことほりを知る  
 岩崎醉芳  
 そそり立つ岩のかけはしひく虹の偉なるをたへ涙するかな  
 たえ間なき恨みに追はれわが息の駛せて成りしや春の夕月

旭山芳子

常春の海の青見るこちして夢かのやうに君れもふなれ  
 春子  
 千仞の深きに落ちぬこころ今さびしきもの外をねもはず  
 朝日山薫  
 君が家は低き山ろばそのわたりほのむらさきに汐ぐもりしぬ  
 いとまなく君が涙のそそげばか青みぬちささわがこころの芽  
 荒涼の胸なる埴も美しくしき花咲かしめぬ君れもふゆゑ  
 君とわが胸にちひさき相愛の花のたをたをひと日咲きぬれ  
 菅原正男  
 うつぶして袖も朽ちよとひた泣きぬ希望のいろに春日くもれど  
 時としてわが愛着の執念を断たむと思ふ日もありしかな

丙午の雲石歌壇

白 箭 朝

- (六)後藤孤星氏 (下) の作中佳なりと思ふものを擧げて見ると、(新聞紙に發表のものは散佚して取調べがつかぬ、主として銀鈴より抜いたことを諒して貰ひたい) 燭の火は奈落に生ひししろがねの蛇の三匹が血を吸ふかたち 潮鳴はうみ鱗族の軍勢が今しごよめくちちごきと見る 雨の日の雲にほの見る紺青の空か君見ぬ人ごみにして
- (七)山本明星氏 の作中、 朝霧の中行く船によく似たる雲のうかびぬ交野の春よ
- (八)米村水聲氏 の作には整ひたるもの多し。 木枯や一山ごよみ四日頃の月は光りぬ古塔の上
- (九)牧岡馨子女史作中、 寒月や氷塊がくれ白熊の吠もる聞くごと身うちふるひぬ

- (三)増野翅白氏 の作中、京の雛妓に代りて春をうたへるものに一首、 桃さかば源氏車に市松の幔幕ひいて鼓はうたむ 清水の塔のあたりに出づるとて利に灯をおひ月をまつかな 摺り裳曳きかつこうち舞ふ七少女ならべるなかに藤原の子も
- (三)立田紅翠氏 作中、 ためらはじめゆるしたびぬ飾れじと二人しよれば美しくしきかな
- (四)立石洲洋氏 作中、 さかしらの世にもあるかな両極の氷ひろごり天地を蔽へ やごとなの黙示に胸の開けては樂もほがらに鳴り出でぬべき
- (五)高城七星氏 作中、 ぐれしかの神話が中の花叢か二人に咲けり相思の春に

(本篇下次號續出)

去年も聞きことしも聞かむほととぎすぬれて 君待つ卯の花かげに あこがれは羅馬の花を一めぐり流離の國に霜 柱しぬ 大老魔の横行し乱調の樂鳴りごよむ君見しきはに

(三)藏田ふたば女史作中、 沈たきて戀びと待つと我むねは天を思ふにひまなき世かな 今日もしも聖顔するうき人と嗤ひたまふをよろこびぬべき 春の雨傘して添ひぬかん母に驚きくと泥する路を

(三)森脇桃村氏 の作中、 美しき岡象の姫の夢趁ひて白き藻がくれ白鳥の泣く 小さき河壟の花ちる野の中を流れぬたへすむつがたりして いと妙に樂鳴り千花かをるかな尺をへだてず君とかたれば

合同の辭

故ありて、我が白鳥會は這の度び銀鈴社と合同することとはなりぬ。今に及びて我が舊白鳥會同人諸士が、從來専ら心を同會の上に寄せて今日まで盡されたる厚意を惜ひ、深く之を謝せずんばならず。冀ふところは、爾後一段の援助を、銀鈴社に加へたまはむことなり。斯くてげに限りなき文藝の妙趣を築まむは、いかに我等の幸ひなるべき。茲に合同の辭を述べ、謹んで同人諸君の健康を祝福し奉る。

明治四十年四月 舊白鳥會主 朝日山錦水

醫院

河野翠激

「なにがし醫院」正面の石階のぼる、平土間に、びいどろ瓶を携へて、薬局と書く窓の口若き女やよるばひし息もせはしくうごめけり

五十左右なる一男、何番と下足の札を呉れたれば、つと右手に折れ、一間の廊下を傳ふ。「控所」に太く記せるがらす見ゆ。中なる人のかすも見ゆ。

文藝雜俎

閑人閑語

たちばな

○風葉の天才 萬朝報に連載中なる小栗風葉氏作小説「天才」は、文學士齋藤信策氏をモデルとせるものゝ如く傳へられたるが、果然、故釋牛博士は原謹之助として、信策氏は健太郎として、漸やく近似せる現象を示さんとす。吾人は、其の餘りに露骨なる描寫に到らざらんことを望む。

○美術審査の怪聞 東京博覽會繪畫鑑別に關し、世間早くも、紛擾を誘起せりと傳ふ、忌々しき限り也。由來美術家の狹量偏執は珍らしからねど、既に一家の名を成せる手前に對しても、今少しく、自ら態度を慎重にせむことを望みて止まず。

○所謂六號活字 新聞雜誌に於ける所謂六號活字の勢力、仲々に凄まじ。吾人全たく之を非認するものにあらずと雖も、夫の濫りに友を傷け、先輩 貶さんとするが如き、過劇なる辞章を嫌ふ。事實を事實として傳ふるは固より可ならざるにあらず、然れ共、爲めに甚だ迷惑する者の生せんことを虞る。新聞雜誌記者各自相戒むる所あらば幸ひ也。

視線あつまる隅の方  
汚き椅子に倒れ凭り吐きぬ。  
せまれの息をほと吐きぬ。  
口疾の女中央に  
喃喃として物語る  
上方辯の軽きかな。  
暫らくありて「こなたへ」と  
さしまねかれぬ。次の室  
持士は聞き年若の  
病者のうめき聞こえけり  
絶ゆると思ふ間もあらず  
うめきの聲はまた聞こゆ  
鏡に見えしれたる女子か。  
かたはち泣ける少女か。  
不治の病者が衰殘の  
なげきの音かや。傷ましき。

文界片々

黒華生

○前田林外氏の幹せる雜誌「白百合」は、同氏病氣のため廢刊せらるべしと傳へらる。

○文庫派詩人河井醉茗氏等の手に於て、新たに新牀詩専門の雜誌發行せらるゝ由。

○夏目漱石氏は帝國大學助教授を辞し東京朝日新聞社に入ることをなれりと。

○新詩社々友董月一露本名佐々木秀道氏及び末吉安持氏は前後して遠逝したり。

○田山花袋氏は長篇の小説執筆中なりと云ふ。

○銀鈴社々友増野翹白河野素陽は濱田中學を卒業せり

○同社友牧仙けい子は職を罷めて、本月初旬上阪したり。

○社友與原碧雲は文部省募集懸賞假作物語の乙賞に當選せり。

○泉鏡花氏の新作小説春陽堂より出版せらるべしと。

○松陽新報社主筆相見繁一氏は全國新聞記者大會余列のため先月下旬上京せり。

○詩人土井晚翠氏仙臺高等學校教授より、職を帝國大學に轉せんとすと云ふ。

△文庫(三の一) 編輯主任は銀鈴社々友山本潜龍にして、以後誌面の刷新を行ひ一大發展を爲さんとす云へり。巻頭土岐湖友氏の短歌五首を載す。其他小栗風葉氏の書簡石垣撲龍氏等の小説と掲ぐ。

△若菜籠(第九號) 募集コマ繪二篇を載す、小學生の手に成る無邪氣な小品文等多し。

△朝虹(三の三) 黒法師氏の「朝虹暮雨」一讀すべし。短歌の少しく革められたるは多とするに足る。

△白虹(二の六) 口繪は宜しく撤去せよ。小坂眉水氏の「旅役者」稍風道人氏の「時觀」見るべきも、韻文に至りては首肯し難し、作家のれ名前を買ふのが能でもあるまじ。信綱汪洋等の詩再び載せ給ふ勿れ。

△新潮(四月の卷) 浪六氏の「盲小路」變哲氏の「女馬士」荻舟氏の「路傍の人」清白氏の「自然の姿」翠溪氏の「山彦」白浪氏の「詩血」等十數篇を收む。時文鼎中沸々毎號面白けれど募集歌に統一なきは口惜し。

△藻の花(三の十二) 紙面は狭い雑誌なれどイッつも引縮りたる編輯、ね手際なり。△山陰公論(第六號)△明ボノ(第拾壹號)△學の友(一の一)

使命 飯塚雲水

奮闘の使命を帯びて  
波濤に揺られつ生れぬ、  
名はあり日本男兒と  
起らん哉激を吹いて

奮闘の使命を享けて  
地を睥み高きに立ちぬ、  
微笑めば敵を容れんに  
可い哉力は満てり。

奮闘の使命を抱いて  
つよき正義の楯をばとりぬ、  
水怒れ山も叫ぶべな  
躊躇はんやと胸の響。

君と別れ秋傷残の翅揮ひさまよふ蝶のすがた  
に在りぬ (紅雨)

感想欄

▲この頃はやらぬが、和歌俳句などに何百圓といふ賞を懸けて募集する位の、問接けたものは恐らくあるまい。

▲と云つて、僕が落選したことがあるかといふ譯では、決して無いのです。(野葡萄)

▲秋旻さんの選にかゝる讀賣新聞の短歌には、どうも我輩感服が出来かぬ。偶には面白いと思ふやうな作がないではないが、所謂座談平語が多く、総じて弱々しくつて氣力がな。

▲正富汪洋さんといへば多少文壇に名を賣つた歌人であるのに、讀賣新聞に掲げられてある氏の作を拜見すると、まことにまづいものがある、先頃の日曜附録に載せてあつた同氏の一夜百首には殊に平凡な作が多い、鐵幹先生の木真似ではないが、詰らぬものを多く作るよりか、少數の價値あるものを作るがよい。(素死)

▲日本唯一の壇場だと誇つて居た「文庫」の俳欄も、近ごろめつきり衰へたやうだ、鳴雪翁の批評も甚だ振つて居らぬ。

▲「新聲」の俳句は碧童氏が選者となつてから投稿者が減じたではあるまいか、但し選者は熱心に殆んど毎號自作を公表して居る。

▲蕪村の作は雄渾だ、漢文漢詩を縦横にこなし、居る所がうまい、百年以前而かも極度にまで俗化した當時の俳壇に立つて、あれ程の名吟を出したといふのは、今更ながら實以て驚嘆せざるを得ない譯ではないか。僕は僕の趣味の上から

「心太逆まに銀河三千丈」  
と云ふのを愛する。(八郎)

▲さる知名の士が、手紙のはじめに「時下春情相催し候處云々」と書いたとか、社撰をトセンと讀んだとかいふことは、随分滑稽な話して、こんな途方もないことを書いたり讀み誤りするものは、幾分か文字のあるものには少いとしても、世間には口利げな顔をしてゐながら「下さい」といふことを「被下い」と書いたり、「感謝し奉り候」(奉感謝候)と讀むべきを「感謝奉り候」と「し」の字を落して讀むものが澤山ある。

▲新聞の論説等を讀んで、いつも猶に障るのは、てにをはの「とも」と書くべき箇所を「も」と誤つてをること

である。先頃某私立裁縫學校とかの設立趣意書を読んで見たら、この誤りが二つ三つあつて笑止に感じた。▲此間、ある友人に歌をやれと勧めたら、自分は根からそんな才がないから、勤めても駄目だと云ふ、それでは、他人の作を読んで味ふ位にはなれと云つたら、自分は何うしても今の歌は解釋が出来ぬといふ。こんな奴は救済の道がない。(吳藍)

▲短歌を作らうと、机の前で苦心して居る所へ、「やア君作詩に餘念なしかね」と詩友がやつて来るのは餘程愉快なものだ。

▲本誌の紅雨兄の詩はしんみりした淋しいものだし、けい子女史のは烈々と熱情が燃えて居る、翅白兄の敘景と來たられ手のもので、七星氏の作は艶麗花の如しだ、と思ふ。

▲僕は「銀鈴」を手にする毎に、深刻な筆致で讀者をチャームして居た二葉女史、桂水氏を想起せずには居られぬ。

▲短歌は作者が増加するよりも、趣味を以て讀む土人の増加する方が望ましい、實際ゴロ／＼した作者が澤山居るよりは、少數でも眞に詩美を味ひ得る讀者が居

春雨日記

よしあき

明日は物理の筆習試問があるといふので、少し復習をやつて置く積り、机の前に座つた。

春雨がしめやかに降る。

とん／＼と階子段を昇る音、宿のね神さんが、ひよつこりのぞひて、

「客さんですよ。」

又、とん／＼と下りた。誰か知らと思つて玄關へ出て見ると、學生服を着た十七八の青年、何かの雑誌をポケットに突ッ込んでゐる。

雙方名乗り合つて漸やく、或る雑誌でのた馴染であることが判つた。

連れ立つて二階へ戻る、新刊の「新潮」を廣げて、俳句だの歌だの、あの作者は嫌いだの、何某はいゝのど、初めて逢つたものぢやないかのやうに、奥底の無く、飾ツ氣のない談話を交換して、幾久しくご交際をど、な互ひに將來を契りつゝ、友はもう歸るといふ。余は丁度町に用事もあるし、一二丁見送らうと立ち上つた。途上友は、ポケットの雑誌「藝苑」を取り出して、見

るのが藝苑百年の企圖を爲す所以ではあるまいかと思ふ。(楚葉)

▲廣告でダメされるは新公論、廣告以上面白いのは文章世界、廣告で買つて損も徳も無いのは新古文林だらう。

▲早稻田文學は青年社會よりも學者間に讀者が多いさうだ。(梅泉)

▲明星派の和歌が、朦朧だの難解だのと、一時は随分八釜しかつたものだが、近頃は餘計こんな小言を聞かぬやうだ。一つは明星派の詩風の變化せるにも依らうけれども、一般の讀詩力が進んで來たことは事實だらう、こんな勢ひで最う二三歩進んで呉れると、大分面白くなることだらう。(東家の子)

▲東京博覽會の雨漏は、近來の滑稽であつたが、油紙を持つて美術館へ馳け附けた画家の態は、頗ぶるご愛嬌であつたと、誰やらの茶咄せり。(白面朗)

▲三月の「新小説」雜錄欄に出て居た「まゝごと」と題せる短篇は二三頁の端物に過ぎないが、仲々輕妙に出來て居た。昨日今日馳け出しの作者が手に成つたものではあるまいと睨んだ。(清風)

給へとそれを余に呉れた。

春雨は尙ほ降りつゝある。

「左様なら。」

「左様なら。」

友は勇ましく小路へ曲つた。

日記の一節

雑吟

春雨や寸に延びたる芭蕉の芽 梅太  
三十三才礫とる間に隠れ鳥 仁子  
雉鳴いて暮れ遅き山のつゝと哉 芳子  
春雨や渡しに近き宿の晝 梅泉  
後宮に君憂うらん春の雨  
葱畑中飛び／＼に土筆かな かをる  
麥畑の中に小ひさき祠かな

○ 春の雨降りぬ病む子が憂恨の涙に似たるしめやかさにて (紅雨)

陽炎會 五句集

(五香報)

春の花類の巻、出句者三十一名

梅散つて鶴寒げなる園生哉  
 蒲公英や小さき蝶の思へらく  
 蛇穴を出て見れば花の盛りかな  
 椿咲き椿散る日毎日毎かな  
 飛鳥倦んで還る林の落花哉  
 培ふて日に酔ふ妹や櫻草  
 うとましや猫捨る川の芹の花  
 菜の花や曲馬師の荷が村に入る  
 瀧道や木に苔青き遅櫻  
 寶物の兎角怪しや花の寺  
 花に來て一路盡きけり雲深し  
 水の泡落花を孕み流れ來る  
 雨降て地固まりし董かな  
 花の土手一步下れば董かな  
 白梅や初穀を焼く煙這ふ  
 梨花の戸に島司の戻る月夜哉  
 紅梅や居を再びす舊草廬  
 初雷や三月寒き花の雨

別天樓

青嵐

松濤樓

稻青

矮松  
魚鱗

村雨

春淺き峽中の家や梅の花  
 雉の尾のあらわに長きつゝとヒ哉  
 木蓮の堅き蕾や涅槃寺  
 花の風關所の幕の孕みけり  
 梅未だ病窓終日鎖しけり  
 梅咲くや妹が机上の烈婦傳  
 石白に櫻さしたる山居哉

幹事吟

住み捨てし東坡が跡や梅の花

山莊の茶燬を捨つるつゝとヒ哉

五香

○陽炎會課題

- 一 春の動物 四月卅日〆切 東都癖三醉君特選
- 一 短夜 五月卅日〆切 河内別天樓君特選
- 一 清水 六月卅日〆切 讀枝松濤樓君特選
- △各五句用紙隨意締切嚴正△回覽互選、銀鈴ホトリギ
- △懸葵シブキ等に報告す△弊會は勸誘的の出句を望ま
- ず△志あるものは奮て投句すべし△癖三醉稻青別天樓
- 青嵐松濤樓君等の出句あり。

△幹事、岡山磨屋町四〇

(五香) 富田武次郎

● 吐 告 ●

▲懸着俳句募集 △課題夏季雑吟△二十句以内△選者  
 羽風梧月兩氏共選へ同一の句二通に明記△天地人六名  
 へ本誌一ヶ月分贈呈直接購讀者は前金中に加算△銀鈴  
 社宛たるべし△締切五月十日  
 ▲選句の未達 前回分俳稿本誌〆切まで選者より返草  
 に接せず、次號に於て兩回分發表すべし。  
 ▲感想欄募集 事および文の如何を問はず、一般の〆  
 切期日に逡ひ續々寄稿あるべし。誌上の匿名は自由な  
 れども、可成住所氏名を明記せられたし。  
 ▲和歌無何添削 返草用貳錢郵券添附下名へ送稿ある  
 べし、一週回以内は修補の上返草す。宛名石見國邑智  
 郡田所村菅原正男、但一ヶ月二十首以内に限る。  
 ▲次號の本誌 には東都杉浦画伯の彩管に成る木版畫  
 挿入の準備中なり。  
 ▲某氏に答ふ 本誌の頁數を増し散文を多く載すべき  
 旨注告ありしも、本誌は固と營利的に發行せるものに  
 非ざるを以て、社友及讀者の數増加すれば益々改善せ  
 らるべきも、若し之が減少を見むか、頁數亦從て減少  
 せむ。是れ本誌が諸君の共有物にして獨り本社の有に  
 非ざる所以也。某氏解し給へりや。

● 銀鈴社清規 ●

- 一 文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たるこ
- とを得べし
- 一 社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを
- 要す
- 一 社友は社内同人を経て本誌編輯其他の議に參與
- することを得
- 一 社友には有効期間毎月銀鈴を無代配送すべし
- 一 支部(社友五名以上)社友は本社直接の社友と同
- 一の待遇を得べし

● 投稿募集 ●

- 一 和歌 一 俳句 一 美文
  - 一 小説 一 評論文 一 長詩
  - 一 小品 一 小品文 一 社友月旦
  - 一 文壇消息 一 歌會句會の詠草
- 用紙は半紙一枚二十行とし一行二十四字詰。種類を異にしたるものは各別紙に認むる事。〆切は毎月十日。投稿は其幼稚なるものと雖も可成補正採用す。秀逸なるものは社中同人の議を経て薄謝を贈る。社友以外と雖も投稿隨意但賞を贈らす。



● 廣 告 ●

河野翠激著  
杉浦朝武畫

短歌零話

全

特價郵稅  
共金拾錢

內容概目

△歌とは何ぞや△神來△歌の用語△櫻翠の詩△難  
解なる詩風△萬里の詩△戦争詩△島根詩人評△平  
易なる歌話等

杉浦朝武画

銀鈴 紀念 繪葉書

四枚壹組

實價五錢  
郵稅貳錢

銀鈴の欄画に用ひたるものを印刷に附し天馬、春  
光清韻、愛美、の四種を一組とし諸子の愛玩を待  
てり。紙質色彩固より特に誇るべからずとすと雖  
も亦一掬の趣致なくんばあらず。

發行所 銀鈴社

| 銀鈴定價表 |       | 定   | 價   | 郵   | 稅 | 廣         | 告 | 料 |
|-------|-------|-----|-----|-----|---|-----------|---|---|
| 一部    | 金五錢五厘 | 金   | 五   | 厘   |   | 一行五號活字二十四 |   |   |
| 六部    | 金參拾錢  | ... | ... | ... |   | 字詰貳拾錢半頁貳圓 |   |   |
| 十二部   | 金五拾五錢 | ... | ... | ... |   | 前金切は帶封に朱圈 |   |   |

明治四十年四月二十五日印刷  
全 四十年四月二十七日發行

銀鈴第貳拾壹號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二

編輯兼發行人 河野岩雄

全縣全 郡川本村大字川本五三八

印刷人 原八太郎

全縣全郡全 村大字 全五三八

印刷所 邑智活版所

島根縣邑智郡田所村

發行所 銀鈴社

銀鈴第貳拾壹號(毎月一回二十五日發行) 明治四十年四月二十七日發行  
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可